

消えぬ間の身をも知る知る朝顔の露とあらずふ世を嘆くかな

紫式部

『玉葉和歌集』「雑」の一首。

「露の消えない間ほどのほかない身と、知ってはいるけれど、知ってはいるけれど、朝顔の上に置く露とはかなさを競ういまの世を、つくづく嘆くことです」。

朝顔は、朝開いてほどなくしほむ。朝顔の花の美しさは、そのはかなさにもあるだろう。本来はかなさの象徴である露のなかでも、朝顔の上に置く露ほどはかなさのものではなく、それと競うほどにいまの世はほかないのだという。

これはいったいどういうことか。詞書には「世の中常ならず侍りける頃、朝顔の花を人のもとに遣はすとて」(世の中が尋常でない頃、朝顔の花を人のもとにお贈りするといつて)とある。

注釈書などによれば、「常ならぬ世」は疫病の流行した年(一〇〇一年)。つまり現代のコロナ禍のような世の中

と思われる。前年の冬から疫病が大流行し、多くの死者が出て京の人々も大混乱するなか、この年の四月に式部の夫・藤原宣孝が亡くなっている。死因は不明ながら、疫病と関わりがあるのではないかという。

そんな背景をかんがみると、この歌の嘆きようも身に沁みてくる。「消えぬ間の身をも知る知る」——露の間のはかない命と知ってはいるけれど、知ってはいるけれど、と繰り返さずにはいられない気持ち、さらに、はかなさの究極とも言える朝顔の上に置く露を引き合いにして、夫の死のみならず、広く世を嘆く歌へと展開している。それはこの歌が独白吟ではなく、「人のもとに遣はす」ものだったからにちがいない。

「遣はす」という言葉から、おそらく身分の高い方への贈り物である朝顔に添えたことが想像される。朝顔の花とこの一首。まことに美しく哀しく、それゆえあざやかな趣向である。

式部は夫の死の後、一〇〇五年(または一〇〇六年)に、中宮彰子に出仕することになる。(小島ゆかり)

